GLA 随想８　霊操行のご提案

GLA を憂う元会員

2013 年 7 月 5 日 第 1 版

目次

1 はじめに 1

2 霊操行の内容 3

2.1 全般的な進め方 3

2.2 「引き寄せ」「刻印」する範囲の限定と細分化について 3

2.3 「引き寄せ」と「刻印」について 4

3 霊操行の実例 7

4 霊操行の深化 13

4.1 霊操行の実際 13

4.2 共同体全体に対する開眼 14

4.3 人類全体に対する開眼 15

1　はじめに

このレポートは、私自身が神意・青写真にアクセスする力を育んでゆくために取り組ませてきて頂いた「霊操行」について、他の皆様にもお取り組みを提案させて頂くものです。より具体的には、この霊操行は、私達が高橋佳子先生との一体化を果たしてゆくことにより、神意・青写真にアクセスする力を育んでゆくことを目的としています。

ここで、私たちがなぜ神意・青写真にアクセスする力を育んでゆく必要があるのかを考えてみたいと思います。GLA 共同体は神の御意志を具現してゆく共同体であり、神の御意志を具現してゆくためには、誰かが神意・青写真にアクセスしてゆかなければなりません。現在の GLA では、高橋佳子先生がその役割のほとんど全てを担って下さっています。

しかし、一人の人間の寿命はせいぜい百年程度の短いものであり、その事は先生についても例外ではありません。先生が御帰天された後も GLA 共同体が神の御意志を具現してゆくためには、弟子が神意・青写真にアクセスしてゆかなければなりません。そして、その事は、先生が御帰天された後になって急に果たそうとしても出来ることではありません。そこで、そのために必要な智慧を今から GLA の場に育んでゆく必要性を感じます。

次に、神意・青写真にアクセスする力を育んでゆくために、なぜ高橋佳子先生との一体化を深めてゆく必要があるのか、その理由を、先生の御著書「二千年の祈り」に著されたアッシジのフランシスコの歩みを振り返りながら検討してみたいと思います。

「まったき託身―アッシジのフランシスコ」の章の最初の部分には、大いなる存在、神との一体化を果たすことが道を求める者にとって如何に大切なことであるか、フランシスコが喩え話を使って説いた逸話が紹介されています。道を求める者にとって、神との一体化を果たしてゆくべき理由は、結力を育むこと、すなわち神意・青写真にアクセスする力を育むことにあるのではないかと考えられます。神との一体化を果たしてゆけば、その度合いに応じて神の意識を自分自身の意識に写し出すことができ、そのことが「神意・青写真にアクセスする」という事に他ならないからではないでしょうか。

大いなる存在、神との一体化を果たしてゆくためには、神の御心を自らの心の中でイメージし、自らの心を神の御心に合せてゆく必要がありそうです。しかし、神の姿は肉の目には見えず、神の声は肉の耳には聞こえません。そのため、神の御心がどのようなものであるのか、私達が直接的にキャッチすることは、なかなか難しいことではないでしょうか。神の御心をイメージできなければ、神との一体化を直接的に果たしてゆくことも、困難であることになってしまいます。

次に、アッシジのフランシスコの章の後の部分では、フランシスコが何事もイエス・キリストに倣い、イエスに一体化するよう取り組み続けたことが紹介されています。その取り組みは、自らの身に聖痕が現れるまで徹底したものであったということです。ここで、「大いなる存在、神との一体化を果たすこと」と「イエス・キリストとの一体化を果たすこと」とは何か関係があるのでしょうか？そこには深い関係があるのではないかと私は思います。

フランシスコの取り組みは、大いなる存在、神との一体化を果たしてゆく歩みには、王道があることを示唆しているように思えます。すなわち、神との一体化を果たしてゆくためには、「大いなる存在、神との一体化を既に最も果たされた方」と一体化してゆくことが、最も早道であり、最も効果的なのではないでしょうか。フランシスコにとって、「大いなる存在、神との一体化を既に最も果たされた方」とは、イエス・キリストであったため、イエスと一体化するよう取り組み続けたのではないでしょうか。

では、現在の私達にとって「大いなる存在、神との一体化を既に最も果たされた方」とは、どなたでしょうか。それは、高橋佳子先生以外には考えられないのではないでしょうか。ならば、私達にとっては、高橋佳子先生との一体化を果たしてゆくことが「大いなる存在、神との一体化」を果たしてゆくことの王道になるということになります。このような観点から、先生との一体化を果たしてゆくことによって大いなる存在、神との一体化を果たしてゆくことがこの霊操行の目的になります。

この霊操行によって真に果報が得られるのか否かについては、これまでのGLA 随想１～７のレポートおよび本ブログの内容に基づいて判断して頂ければと思います。

2　霊操行の内容

2.1　全般的な進め方

この霊操行は、高橋佳子先生のご著書またはご指導映像などに基づいて進めてゆくものです。霊操行は、これまで皆様が取り組まれてきた「聴講」「映像反芻」「霊的読書」のある種のバリエーションであり、基本的には霊的読書等の進め方に従って取り組んで頂くことになります。但し、「先生との一体化を果たしてゆく」という目的により、通常の霊的読書等とは異なる方法を採ることが望ましい部分があるため、本レポートにおいても、「どの点が異なるのか」ということを中心として解説してゆきます。

GLA テキストブック「GLA 会員の基本ライフスタイル」(以下、単に「テキストブック」と呼びます) の 76 ページには、「霊的読書」について「祈り」「読書」「反芻」「引き寄せ」「刻印」「祈り」「実践」という 7 つのステップが示されており、同 77 ページによれば、「聴講」「映像反芻」についても同様に 7 つのステップにより進めてゆくことが誘われています。

霊操行もこれら 7 つのステップに従って進めてゆきますが、通常の霊的読書等と比較して以下の 3 点が異なります。そこで、これら 3 点の内容について説明します。

1. 「引き寄せ」「刻印」する範囲を限定し細分化する
2. 「引き寄せ」では先生の御心と自らの心を一致させる
3. 「刻印」では先生のお言葉を実際に声として出す

2.2　「引き寄せ」「刻印」する範囲の限定と細分化について

テキストブックの 80〜87 ページには、「引き寄せ」についての解説があります。その冒頭には『読んだところを辿りながら、その内容を 1 つ 1 つ自分に「引き寄せ」てゆく』とありますので、これは「読んだ範囲の全体を引き寄せる」という意味であると考えられます。

但し、霊操行は、通常の霊的読書とは異なり、一文一文に強いエネルギーを

注いでゆくことにより、自らの心を変革してゆくことを内容としています。長い文章では、そのエネルギーを持続させてゆくことが困難になりますので、特に最初のうちはなるべく短い範囲（例えば、数行〜十数行程度）を「引き寄せ」の対象として選択して頂くことが望ましいと思われます。

　また、霊操行では、選択した範囲（数行〜十数行程度）をさらに短い範囲（例えば一文ごと）に区切り、その区切った範囲毎に「引き寄せ」と「刻印」を繰り返してゆきます。これは、やはり「強いエネルギーを注いでゆく」ことを容易にするためであり、長い文章を一度に引き寄せようとすると、エネルギーを注ぐ焦点が絞りづらくなると思われるためです。

2.3　「引き寄せ」と「刻印」について

「引き寄せ」のステップは、短い範囲（例えば一文ごと）に区切った文章に基づいて、先生の御心を感じさせて頂くことから始まります。先生が著された「御文章」、あるいは先生が発せられた「お言葉」とは、五感では把握できない先生の御心、すなわち「先生の空」が五感で把握できる文字、すなわち「色」となって結晶化したものです。私達は、この「色」を介在として、「先生の空」にアクセスし、先生の御心を感じさせて頂きます。

　ここで、とても大切なことがあります。それは、本来「引き寄せ」の対象とさせて頂くものは先生の御心、すなわち「先生の空」であって、「色」の次元に現れた文字やお言葉そのものではありません。「先生の空」を文字で表現することは難しいのですが、例えば、「太陽のように輝く愛と智慧の源泉」と表現することができるのではないでしょうか。

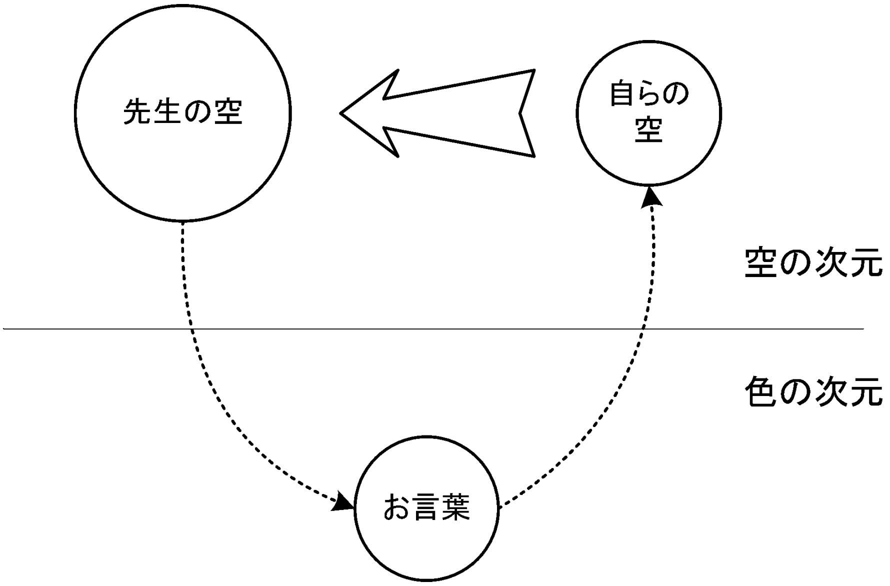

図１　引き寄せの対象は「先生の空」であって「お言葉」そのものではない

先生の御心が感じられましたら、次は自分自身の心がどんどん大きく広がり、輝きを増し、先生の御心と一体になるように、イメージし、そのイメージの通りになるように念じます。「自分自身の心が先生の御心と一つになった」と感じられましたら、次はその範囲の「刻印」のステップに進みます。

「刻印」のステップでは、区切った範囲の御文章が、自らの心から、自らの言葉として、自然に湧き出ることを、**「実際に声に出してみる」**ことによって確認しつつ刻印します。テキストブックの 88 ページには、「刻印」について「できるだけ手書きで記す方が効果があります」と記されていますが、これは通常の霊的読書において「自らの感想や気づき、後悔や願い」などを刻印する場合であって、霊操行において「先生のお言葉が、自らの心から、自らの言葉として、自然に湧き出る」ことを確認するためには、「実際に声に出してみる」ことが最善ではないかと考えます。

このように、先生のお言葉が自らの言葉として自然に湧き出てきましたら、次の範囲の御文章について、同様に「引き寄せ」「刻印」のステップを進めてゆきます。

一方、御文章が自らの言葉として自然に湧き出てこない場合は、「引き寄せの度合い」つまり「一体化の度合い」が未だ充分ではないということになりま

す。その場合には、同じ範囲について、もう一度「引き寄せ」「刻印」を繰り返して下さい。

テキストブックの p80～86 においては、霊的読書に取り組ませて頂く際の「引き寄せ」のための３つのヒントとして、以下の点を誘って頂いています。これら３つのヒントは、霊操行においても大切な視点になるのではないかと思われます。

- ヒント１ 取組みを誘われているところは、実際に取り組んでみる。
- ヒント２ 自然にうなずきながら読み進んだところは、自分の実際の毎日や人生に当てはめてみる。
- ヒント３ つまずきを感じたところは、出てきた「つぶやき」やその背景を意識化してみる。

3　霊操行の実例

GLA 誌 2006 年 6 月号の p36〜37 には、次の枠内の記事が掲載されていました。この中から、太字で表示した 5 行のお言葉を「引き寄せ」の範囲とした「引き寄せ」「刻印」のステップの実例を解説します。なお、「引き寄せ」「刻印」以外のステップの内容は、通常の霊的読書と同様です。また、文中の会員名は仮名にさせて頂きました。

この記事は「GLA 随想 5」のレポートでも取り上げさせて頂いたものです。この記事は先生ご自身が執筆されたものではないため、実例として取り上げることはやや変則的ではあります。しかし、この記事は 7 つのプログラムの進捗を促進するために重要であると思われ、また「引き寄せ」の範囲は全て先生のお言葉であることから、取り組みの実例として取り上げさせて頂きました。

「どこにあっても心は一つ」—青木辰男さんへのメッセージ

「こうやってどんな場所にあっても、私たちはつながっています」

四月十六日、大阪で「ジェネシスプロジェクト研鑽」のご講義を終えられた先生は、いつものように、帰京の飛行機に間に合う出発時間ぎりぎりまで会員の方々との出会いを重ねてゆかれた。そして、空港へ向かう車中では、九州本部の豊心層会員、青木辰男（あおき たつお）さんへのお手紙（メッセージ）をビデオに吹き込んでくださった。

青木さんは、現在、「四聖日の集い」を中心に研鑽されている会員の方で、ホーム（老人福祉施設）に入所されている。「ジェネシスプロジェクト研鑽」が始まる前、まだお体が元気な頃は、九州本部の事務所で熱心にプロジェクト活動をされていた。当時は、ワープロやパソコンが普及する前で、本部内の掲示文や本部からの案内文も、全て手書きの時代。字のきれいな青木さんは、そうした掲示文や案内文を作成するプロジェクトに入られていた。

そして、二〇〇四年七月、妻の宏美さんが実在界に帰られることになったのだが、その宏美さんが「夫が一人で残り、生活するのは、どれだけ大変なことでしょう」と心配され、先生に「先生、辰男のことをお願いいたします」と伝えてこられたのだ。

その、今は亡き妻の宏美さんのお気持ちを受け止められながら、先生は青木さんに語りかけられた。

「辰男さん、お体の方はどうですか。宏美さん亡き後、今、ホームの方においでになりますが、お一人で寂しくはないですか。私は、こうやって一緒に歩んできた皆さんが、人生の大切な締めくくりの場所を寂しく一人で生活するなどということは、本当に申し訳なくて、申し訳なくて、言語道断（ごんごどうだん）なことだと思っています」

先生のお声は震えていた。先生にとって会員のお一人お一人はかけがえのないご自身の家族—。そして、先生は、心眼に映る、ホームでの青木さんのお部屋の様子に触れられた。

「ホームのお部屋が見えますよ、辰男さん。もうあちらこちらに、ずーっと私の本や写真を置いて下さってね、お一人なのににぎやかね。、……こうやってどんな場所にあっても、私たちはつながっています」

さらに先生は、老いの意味や青木さんの人生の意味について明かしてゆかれた。

「ホームと GLA の場所は少し離れて寂しいけれど、それでも心は一つ。肉体的にも、つらい日もおありでしょう。年を取るって、今まで頂いてきた体の力を全部返すことだから、つらいことですね。でも、逆に、自然に当たり前に動かしていた腕や足や腰の一つ一つは自分の体だと思ってきたけれども、生かされてきたんだなって—生きることってつらいし、生きるってすごいことだったなって（実感することができます）……魂願とカルマを持って現象界に飛び出して、受発色して生きるために生まれてきての人生だった（と思い出すことができます）。

辰男さん、いくつかの願いがあったけれども、辰男さんが今世、求道者として生きるっていう約束は果たせましたね。「わしの人生、何だったのだろうか」ではなく、求道者として生きるっていうことは、一つ一つ形になって、魂願は成就しましたね。ありがとうございます。」

そして、先生は、体調が優れず、「善友の集い」に参加できなかった青木さんのために、「菩薩の祈り」の一節を祈り、青木さんに届けてくださったのだ。

記事中の太字の部分について、まず、次の前半の部分を引き寄せてみましょう。

（前半部分）

「辰男さん、お体の方はどうですか。宏美さん亡き後、今、ホームの方においでになりますが、お一人で寂しくはないですか。」

この部分を引き寄せるためには、テキストブックのヒント２にあります「自分の人生に当てはめてみる」という事が鍵になるかもしれません。「自分自身の家族が全員亡くなり、自分一人だけが残された状態」、「その自分自身も老いてしまい、一人で生活することが困難になり、老人ホームに入居している状態」というものを、心に描いてみることはできないでしょうか。

老人ホームの部屋の状態も、具体的に思い浮かべてみてもいいかもしれません。どのような間取りで、どこに何を置けばいいでしょうか。青木さんは、お部屋のあちらこちらに先生の御著書やお写真を置いておられるということですが、私達も同じ立場になれば、同じようにようにするのではないでしょうか。そして、志があっても、なかなかGLAの場に集えない辛さ、寂しさ、というものを、自分自身の事として感じてみましょう。

青木さんが現実に感じておられる辛さ、寂しさを引き寄せることができましたら、今度はその青木さんを見つめる先生の御心を感じさせて頂きます。すなわち「太陽のように輝く愛と智慧の源泉」としての先生の御心を、自らの心が及ぶ範囲で、精一杯感じさせて頂きます。そして、自分の心が大きく広がり、

輝きを増し、先生の御心と重なって一体化する事をイメージし、そのイメージの通りになるように強く念じます。

次に、「辰男さん、お体の方はどうですか。宏美さん亡き後、今、ホームの方においでになりますが、お一人で寂しくはないですか。」というお言葉を実際に発してみましょう。このお言葉が、自らの心から、自らの言葉として、自然に湧き出てくるかどうか確認してみて下さい。自然に湧き出てこない場合には、もう一度取り組んでみて下さい。

ただ、何回取り組んでも、このお言葉が自らの言葉として、自然に湧き出てこない方もおられると思います。それは、テキストブックのヒント３にある「つまずきを感じた」という事になるのではないでしょうか。その際には、「あなたにとって大きな転換の鍵があり、長年超えられなかったテーマを超える手がかりがあるのです」というお誘いを思い出して頂きたいと思います。

先生との一体化を果たせない要因の一つとして、ヒント３にて先生が誘って下さっているように、「つぶやき」やその背景が影響しているのかもしれません。これらを意識化してみることが大切ではないでしょうか。つぶやきとその背景を意識化できたからといって、直ちに先生との一体化が深まるわけではありませんが、「この部分は素直に一体化できない自分がいるな」と客観的に意識化できただけでも、将来の大きな可能性につながってゆくのではないでしょうか。

もう一つ、先生との一体化を果たせない要因として考えられる事は「慣性力」ということです。私達の心の働かせ方は、長い長い転生輪廻の期間を通じて魂が身につけてきたものであり、強い慣性力が働いています。「ぜひ先生と同じように心を働かせたい」と願っても、なかなかそのように心が働かないという事を体験されるかもしれません。それは、言葉を変えれば、「まだその段階にまで菩提心が育まれていない」という事であり、一体化できない箇所は、「育むべき菩提心を示唆する箇所」と言えるのではないでしょうか。この事も霊操行にチャレンジしたからこそ意識化できたことであり、菩提心を育んでゆける可能性につながってゆくのではないでしょうか。

前半部分のお言葉が自然に湧き出てきた場合には、次に後半部分のお言葉を引き寄せてみましょう。また、この段階で前半部分の引き寄せができない場合

であっても、後半部分の取組みを通して前半部分も引き寄せることができるかもしれませんので、後半部分の取組みを進めて頂きたいと思います。

（後半部分）
「私は、こうやって一緒に歩んできた皆さんが、人生の大切な締めくくりの場所を寂しく一人で生活するなどということは、本当に申し訳なくて、申し訳なくて、言語道断なことだと思っています」

この後半部分を引き寄せるためには、まず「一緒に歩んできた皆さん」の箇所について、やはりヒント２の「自分の人生に当てはめてみる」という事を試みて頂きたいと思います。高齢の同志の方々の中で、「昔はよくお会いしたのに最近はほとんど見かけない方」はおられないでしょうか。もし、おられるなら、「一緒に歩んできた皆さん」という言葉とともに、その方々のお顔を思い浮かべて頂きたいと思います。

次に、「人生の大切な締めくくりの場所」について考えてみたいと思います。先生は、「老いの季節」の意味について、様々な御指導を下さいました。例えば、GLA 誌 2011 年 2 月号 p22～25 の「豊心大学入学のご案内」の記事には、1988 年の豊心大学開設にあたっての御指導、2010 年の豊心大学における御指導の抜粋が掲載されています。私達には、60 歳前後に人生を振り返るきっかけがあり、それが中ほどの結果、「中果」という事になります。この「中果」を振り返るまなざしや智慧があるのなら、私達は再びチャンスを得て、新しい人生に向けて「再起因」させることができ、その人生を生きることによって「大果」を結ぶことができます。また、これらの御指導の通り、「大果」を結んでゆかれた豊心大学の同志の皆様の神理実践も思い起こされます。これらの事を通して、私達は「人生の大切な締めくくりの場所」というお言葉を引き寄せてゆくことができるのではないでしょうか。

次に、「寂しく一人で生活するなどということは、本当に申し訳なくて、申し訳なくて、言語道断なことだと思っています」については、いかがでしょうか。「言語道断」とは、「言葉で言い表せないほどひどい」という事ですが、これは先述の「人生の大切な締めくくりの場所」のお言葉を引き寄せることができれば、自ずと納得できることではないかと思います。私達は、人生の締めく

くりの時を迎えている同志の皆様が真に「大果」を結んで頂けるように環境を整えてゆく使命を頂いているのではないでしょうか。

以上の部分について、引き寄せができたと思われたのでしたら、実際に声に出してみましょう。「私は、こうやって一緒に歩んできた皆さんが、人生の大切な締めくくりの場所を寂しく一人で生活するなどということは、本当に申し訳なくて、申し訳なくて、言語道断なことだと思っています」というお言葉が、自らの心から、自らの言葉として、自然に湧き出てくるかどうか確認してみて下さい。自然に湧き出てこない場合には、どこかの部分について引き寄せが充分ではないということになります。その場合は、もう一度「引き寄せ」を試みて頂きたいと思います。どうしても引き寄せができない場合は、前述しましたように、「つぶやき」やその背景が影響しているのかもしれませんし、自らの「慣性力」に打ち克つ菩提心が未だ充分に育まれていないのかもしれません。

一方、先生のお言葉が自らの内から自然に湧き出てくるようになれば、見えてくることがあると思います。それは、高齢の同志の皆様が人生の大果を果たしてゆかれる環境を整えるため、通信ネットワーク環境を整備して自宅や老人ホームなどで集いに参加できるようにすることや、相応の準備が整った後に老人ホームを運営するなどの事業を展開しなければならない、という事です。その必要性、必然性が心に迫ってくるのではないでしょうか。そして、「現にそれが無い」（2011 年現在）という事が、「いかにもおかしい事」と思えるのではないでしょうか。

実は、この霊操行はさらに次元を深めてゆくことができるのですが、その点は次節にて後述することとし、本節においては、この段階までにとどめておきます。

4　霊操行の深化

4.1　霊操行の実際

霊操行は、高橋佳子先生が著された「御文章」、あるいは先生が発せられた「お言葉」から先生の御心を感じさせて頂くことが鍵になります。しかし、実はこの点に非常に難しい問題が潜んでいます。私達は誰しも「人生の基盤」というものを持っており、何事を認識するにしても「人生の基盤」のフィルターを通して認識することしかできません。また、一人一人の魂には「器」というものがあり、自らの「器」を超えることは認識することができません。

そうしますと、「先生の御心を感じさせて頂く」といいましても、私達は、「人生の基盤」のフィルターを通して歪められ、自らの「器」によって制約された「先生の御心」しか感じることができなくなります。このようにして私達の意識に映し出された「先生の御心」とは、実際の「先生の御心」には程遠いものであり、それはむしろ自分自身の意識の状態を色濃く反映した虚像のようなものでしかないように思えます。

しかし、自らの意識に映し出された「先生の御心」の方向性が概ね正しいものであれば、そこを目標として一体化してゆくことは自らの魂の成長につながってゆきます。自らの境地が深化し、魂の「器」が広がってゆきますと、自らの意識に映し出される「先生の御心」も、より正確な方向に成長してゆきます。そうなりますと、その成長した目標に向かって再び歩み出せばよろしいのではないでしょうか。このような取り組みを繰り返すことによって、「本当の先生との一体化」を深めてゆくことができるものと考えられます。

本節に以下認めさせて頂く内容も、そのようにして自らの意識に映し出される「先生の御心」が成長してゆく道程を現しています。

なお、自らの意識に映し出された「先生の御心」の方向性が大きく外れている場合は、そこを目標として一体化してゆくことは問題が生じるかもしれません。しかし、ご著書やGLA誌の記事、あるいは「反芻用」として指定された御映像の中から行の対象となる題材を選んでゆけば、それほど大きな問題は生じないものと考えます。

4.2　共同体全体に対する開眼

先生は「反芻」という事の大切さについて、テキストブックの 68 ページや 74 ページにて「映像反芻」および「霊的読書」を例として誘って下さっています。私達人間には、何ごとに対しても一度「わかった」と感じると、もうそれ以外の見方をしなくなる傾向があり、「わかったつもり」ほど、神理の道行きや魂の成長を閉ざすものはなく、一度や二度御著書を拝読しただけでは、御著書に込められたいのちを充分に汲み取ることはとても難しい、ということです。

霊操行についても、ある対象について一度取り組んで終わり、という事ではなく、同じ対象について何度も取り組ませて頂くことにより、新たな気付きや発見を頂くことができるのではないでしょうか。前節にて取り上げました GLA 誌 2006 年 6 月号の記事を例として、この点を考えてみたいと思います。

「私は、こうやって一緒に歩んできた皆さんが、人生の大切な締めくくりの場所を寂しく一人で生活するなどということは、本当に申し訳なくて、申し訳なくて、言語道断なことだと思っています」とのお言葉は、一見すると先生が自責の念を表明されているかのように思えるかもしれません。しかし、ある程度、霊操行に取り組まれたのであれば、「先生が単純に自責の念を表明されたのではない」ということに気付かれるのではないでしょうか。

先生が自責の念を表明されたことは過去にも何度かありました。例えば、1997 年には神戸市須磨区で、中学生による連続児童殺傷事件が起こりました。その際に先生は「人間の心がどんどん壊れていっている。『何をやっているんだ、何をやっているんだ』と私は耳元で怒鳴られている気がしました」と仰いました。このお言葉からは、先生が人類全体に対して抱いておられる深い御慈愛と責任感を感じさせて頂くことができます。その一方で、先生が自責の念を表明された事柄は、正直申しまして、私達には到底責任が取れそうにない事柄ではないでしょうか。先生が自責の念を表明された他の事柄と比較して、青木さんの事例は、あまりにもレベルが違うという事に気付かされます。

青木さんと同様の状態で暮らしておられる同志の方は、何十年も前からおられたと思われますし、その時に対策を講じていれば、青木さんについては間に合ったのではないかと思われます。また、「本当に申し訳なくて、申し訳なく

て、言語道断なことだと思っています」と仰ったのは、2006 年 4 月 16 日のことでしたが、それから 5 年以上経過しても（2011 年現在）、その状態に何も変化が生じていません。

この事は、「現状を変革してゆくにあたって、弟子が発心して解決と創造の青写真にアクセスして動かない限り、先生が動かれることはない」という事ではないでしょうか。その理由については、私は次のように受け止めさせて頂いています。神、先生の前において、一切の人は平等です。「高齢の同志の皆様が人生の大果を果たしてゆかれる環境を整える」という事は、とても大切な事であり、先生はすぐにでも実現したいとお考えではないでしょうか。その一方、一般会員をお世話する立場の弟子は、「同伴、お世話を果たしてゆく智慧と境地を身につけたい」という願いを持って出生してきたわけですから、その願いも果たさせてあげたいとお考えではないでしょうか。

後者の弟子の願いを適えるのは、容易なことではなく、結局のところ弟子自らが発心して願いに向かって歩みださない限り、その願いは適いません。後者の弟子の願いを適えるために大いなる存在、神が準備されたテーマの一つが、「高齢の同志の皆様のお世話を如何に果たしてゆくか」という事ではないでしょうか。このテーマを果たしてゆくにあたって、先生が主体的に関わられますと、それだけ弟子の修行の機会を奪ってしまうことになります。しかし、先生が全く関わられなかったとしますと、弟子はテーマそのものの存在にすら気付けないかもしれません。先生は、「必要最小限、ぎりぎりのご助力」の内容を見極められ、実行して下さったのではないでしょうか。

4.3　人類全体に対する開眼

前項にて「神、先生の前において、一切の人は平等です」と認めさせて頂きましたが、実は霊操行の深化がある段階に達すると、私達は「一切の人を平等に愛する」という次元を自ら体験することができます。私達は様々な尺度（例えば GLA 会員と非会員、日本人と外国人、善人と悪人など）で人間を区別することができます。しかし、「一切の人を平等に愛する」という次元では、それらの区別が全くなくなり、「あまねく存在（もの）のうえに　限りなき慈愛を注ぐ」という自律の言葉の一節が「理想」ではなく「現実」のものとして感じることが

できるようになります。それは「常にそのように生きられる」ということとは別問題ですが、「確かにそのような次元が自分の内にもある」ということは実感できます。

先生のお言葉の中には、時折、一部の人に対して愛が偏重しているかのように見受けられるものが存在します。ある集いでは、一人の会員さんに対して「３０年も一緒にいれば、もう家族じゃありませんか」と仰ったことがありました。その際には「では、GLA に何年在籍すれば家族だと認めて頂けるのだろうか」と思われた方もおられたかもしれません。また、ご著書「魂の冒険」「魂の発見」には、日本の産業が衰退して様々な側面で韓国、中国に追い抜かれていることが認められています。これをお読みになった方の中には、「先生も一人の日本人として、日本が外国に追い抜かれていることを悔しがっておられるのだ」と思われた方もおられるかもしれません。

しかし、「一切の人を平等に愛する」という次元を自らが体験しますと、これら一部の人に対して愛が偏重しているかのようなお言葉は、全て「方便」であることが解ります。、多くの人にとって「一切の人を平等に愛する」ということは、実感的に理解できることではありません。「限定された範囲」の愛しか理解できない相手に対しては、その「限定された範囲」の愛を実感して頂き、実践して頂くとともに、その「限定された範囲」を少しずつ広げて頂くことしか道は無いのではないでしょうか。

そのような視点から、上述の GLA 誌の記事を再び読み直してみますと、先生は「GLA 共同体の中で共に研鑽され奉仕されてきた方」に対する愛の心を育むことを求めておられることが解ります。これは、相当に限定された範囲であり、一切の人の救済を目指して歩み出すには程遠い感があります。「現在の GLA ではこの程度のことしか説けないし、この程度のことすら果たせない。しかし、それが現実であるならば、そこから確実な一歩を踏み出してゆくしかない」という先生の想いが文面から伝わってくるように感じられます。

以上